

木田市長の



vol.55

ハングリー精神を忘れた日本人？

去る4月3日、松阪出身の徳真鵬関を招いて、中央公園相撲場の新しい土俵開きが開催されました。4日には伊勢神宮奉納大相撲があり、2日間連続で国技「相撲」に接することとなりました。

現在、大相撲はモンゴルやヨーロッパ出身の力士がその強さを誇っており、日本人力士のふがいなさを嘆いたり、奮起を期待する声も多く聞かれます。横綱白鵬は万全の強さであり、大関把瑠都は未恐ろしい程の可能性を感じます。それにひきかえ日本人力士はどこか元気がありません。横綱になろうかという力士はしばらく出てこないような気がします。なぜ、これほどまでに外国人力士が優勢なのか。

そこでよく言われるのは、

「日本人には、もはやハングリー精神がない」ということです。昔から、土俵の中にはお金が埋まっただけで、がんばって強くなれば、いくらでもお金を掘り出すことができると言われていました。

白鵬が懸賞金だけでも百万円、2百万円を受け取っている姿を見ていると、まさにそのとおりだなと思わずにはいられません。

ところで、日本人に元気がないのは相撲の世界だけではなくありません。世界の中で、日本は経済活動で低迷を続け、こどもたちの学力は低下し、国の負債は1千兆円に向かって増え続けている状態です。

相撲の世界でも、経済の世

界でも、日本が回復するためには、日本人がハングリー精神を持つことが必要なのではないか。しかしすぐに日本人にハングリー精神が身につくはずもありません。わたしたちがこどもの頃は、誰かがおいしいおやつを食べていても、そのおやつはその誰かのもので、ほかのみんなは指を食わえて見ていたものです。

給食費を払うことより、パチンコや携帯電話に払う方が大事だと考えている甘い人が多くなっているテレビ報道にありました。そんな日本国民がハングリーになるはずもありません。「栄枯盛衰」という言葉があります。ハングリーな人は、がんばって盛んになろうとし、盛んになり栄えるようになれば、ハングリー精神は忘れてしまいます。歴史は繰り返されています。

人々や国が豊かになって、ハングリー精神に頼れなくなっても、世界の人々から好感をもたれ、ポチポチと発展していく、地に足のついた活動が日本人に求められているのかもしれない。

人権文化の花を咲かせよう

Vol.94

一番大切なこと

先日の人権講演会では「生命の尊さをみつめよう」と題し、山田パンダさんのお話を伺いました。

参加者の中には、もうすぐ母親になられるかたもみえたり、鳥羽の人が話を聴く熱心な姿勢に講師のかたも感心されていました。

講演の中では「これから話す内容が一番大切なことです。のでぜひこれだけでも覚えていってください」という場面があり、大人とこどもが地域の中で声を掛け合って一緒に

なって繋がっていくことがいかに大事かという内容でした。また、お話が進むにつれ何回も何回も、違った内容の「一番大切なこと」が出てきました。

どれをとっても、なるほどと思えることばかりで、お話が終わる頃には「一番大切なこと」は、ひとつでなくてもいいんだな、という想いに包まれていました。

現代社会には情報とともに「無関心」も溢れています。若葉の季節、新しい環境でこどもたちが、色々な人の色々な「一番大切なこと」の輪の中で育つことができれば素敵なことだと思いました。

※子どもの人権110番
0120-0007-110
平日の午前8時30分〜午後5時15分まで通話料無料で開設しています。

先生や親には言いづらいことや誰に相談していいかわからないとき、ほんのちよつとした悩みでも活用してください。

